

に、いま経済的環境条件に対応して人間関係観が変質しつつあることを示しているだけでなく、日本人の意識構造が大きな転換期にさしかかっていることを示唆しているようにも思えるのである。

## 「Batchelder と Romney の正答のないテスト理論」の拡張と アンケート調査法への応用

吉野 諒三

社会科学における客観的データ収集の方法として、しばしばアンケート調査の手法が用いられているが、先進諸国のように流動性が激しくまたプライバシーの尊重が声高々に叫ばれる社会においては、従来の全抽出法、標本抽出法によるアンケート調査の回答回収率が急速に低くなりつつある。また、人件費の高騰化傾向を考えると、フィールド・ワークを遂行する有能な調査者を確保することの困難さの割合が増してきているという問題が生じている。本研究では、物理的に或いは経済的に、少数の回答者からのデータしか収集できない場合でも、より信頼性の高い分析結果を得る手法を開発しようとする一つの試みとして、Romney et al. (1986) と Batchelder and Romney (1988) によるテスト理論を応用、拡張したモデルを構成し、さらに、そのモデルの一つの応用例として、総理大臣官房広報室の過去14年間にわたる継続調査によって得られた、日本人の国民生活に関する世論調査のデータを分析した。このモデルは、回答者からの回答データのパターンから、テスト理論における回答者の「能力」に対応するパラメーター  $D_i$  と「正答」とを推定するものである。

分析されたデータは、1972年から1985年の14年間の調査表から、同一の質問文、同一の回答選択項目の質問で、かつ生活意識をよく表していると思われるもので、14年間継続調査された11の共通質問項目に対応する回答データである。とくに、(1)1972年から1985年の間の時代の変化と(2)世代(年令層)による回答の差(1985年次)を調べた。結果として、(1)では、これらの年次中、1974年次と1985年次の  $D_i$  の値は他の年次と比べて異なる事を検出した。これは、鈴木(1988)によるもの単純集計データに対して、最小次元解析法の特殊な場合を適用した時代の推移の解析結果を再確認した。即ち、これらの年次は、「経済の好・不況」と「時代の流れの方向」の次元において極端に位置しているのであった。(2)については、 $D_i$  の値は若年世代ほど高く、老年世代ほど低くなっている事を検出した。これは、少なくとも1985年においては、若年世代が日本の世の中の意識、雰囲気を代表しているという解釈が示唆されている。詳細は吉野(1990)を参照。

### 参 考 文 献

- Batchelder, W.H. and Romney, A.K. (1988). Test theory without answer key, *Psychometrika*, 53, 71-92.
- Romney, A.K., Weller, S.C. and Batchelder, W.H. (1986). Culture as consensus: a theory of culture and information accuracy, *American Anthropologist*, 88, 313-338.
- 鈴木達三(1988). 継続調査データの再分析—時代区分の考察と意見構造の経年的推移—, マーケティングリサーチ, No. 49 (夏期号).
- 吉野諒三(1990). 「Batchelder と Romney の正答のないテスト理論」の拡張とアンケート調査法への応用, 統計数理, 37, 171-188.

## 意識の国際比較方法論 (IV)

鈴木 達三

昭和62年度・63年度に実施した調査の調査結果を整理し、集計分析用共通ファイルを作成した。これに基づき、関連調査との比較を行なうとともに、各国共同研究者との結果分析・検討を行なった。